

連載  
講座

第48回

## 邪教扱いされた科学・橋本宗吉（下）

作家 童門冬二

幕末に近い時期に、大坂町奉行所に大塩平八郎という与力があった。後に“大塩の乱”を起す。“大坂ファースト”を実行し抜いた有名な役人だ。学者だ。ただし、儒学コチコチの学究の徒だった。したがって、多少考えの幅が狭い。この大塩の功績と云われる中に、「豊田貢の邪教事件」というのがある。豊田貢は老婆で京都の女性だ。大坂へやって来ては堂島のような盛り場で加持祈祷を行う。吉凶を占う。そして、

「自分が信ずる宗教を信じれば家運が隆盛になる」などと唱えた。大塩はうさん臭さを感じ、徹底的に調べた。やがて、豊田貢が京都の女性であり、五十四歳、自分の家の庭に大明神を祀っていた。しかし貢の唱える呪文は、「センスマルハライツ」というものだ。明きからに、当時隠れキリシタンが唱えていた「ゼス・マリヤ・ハライツ」を変えたものである。ハライツとは天国のことだ。ゼスマリヤというのは「聖マリア」のことで、キリストを産んだ聖母のことである。貢はこの信仰を広め、

「病人が出たら紙人形を作って板に貼る。そして患部にくぎを打ち込む。たちまち治る」などと言っていた。彼女の信仰の対象は“天帝如来”だった。その画像を飾っていたが、左手に小さい子を抱き、右手に剣を持つという怪しげな像だった。キリストとマリア、しかもこの女神をウスメのミコトと呼んでいた。ウスというのは、天帝のことだということから“デウス”のことだろう。

いずれにしても大塩は、

「明らかにキリシタンの影響がある」と感じ、徹底的に貢を調べ上げた。貢はついに、

「水野軍記というキリシタンから、その秘法を学んだ」と白状した。大塩はこれを上部に上申し、

「貢並びにその教えを積極的に世に広めた者たちを、磔に処する」という刑を求めた。大坂町奉行所だけでは処理できないので、江戸城の評定所に上申された。評定所はいろいろと論議したが、結局は、

「この程度のまやかして、キリシタンと断ずることはできない」と言って再審を命じた。が、老中会議が反対した。老中会議は、

「一旦キリシタンと断じた者を、そうではないと調べ直しを行えば、却って市民は混乱する」といい、

「大坂町奉行所の決定通り、豊田貢たちを磔に処すべきである」という裁決を下した。

この限りでは、今書いている橋本宗吉のエレキテル論争とは関わりがない。豊田貢と共に、

「同じような主張を社会に振撒いている」という疑いで逮捕された医師が二人いた。一人は伊良子屋桂蔵、そしてもう一人が藤田頭蔵である。二人とも宗吉を師と仰ぎオランダ学を学んでいた。西洋医学に関心を持っていた。しかし、桂蔵の方はキリシタン関係の書物を多数所持していて、しかも彼自身キリシタンの教えを深く信奉していた。取り調べの時も、自分の主張を堂々と述べて怯ま

なかった。そのために、罪を逃れることは出来なかった。結局は、二人とも磔にされてしまったのである。

幸いなことに、二人とも宗吉の名を出さなかった。宗吉まで類が及ぶことは無かった。しかし宗吉は頭を抱えた。それは、  
「学んでいる洋学が、こういう解釈をされると、結局は邪教と思われてしまう」

という事実に対してである。宗吉は、かつてエレキテルに関する書物を表し、その中ではかなりエレキテルが手品めいたことを行っている例を書き記した。はじめて、ただ人寄せ・人集めだけに、そういう記述を書くと却って害を流すということを知った。幸い彼の名は、そういう書物によってではなく「オランダ医師」としての名を高めていたので、事件とは無関係に済んだが、宗吉自身に与えたショックは大きかった。せっかくのエレキテル研究も、やはり進めれば進めるほど豊田貢事件で刑死した、二人の弟子の事が思い起された。そのために、次第に身が入らず生業であるオランダ医者の方の業務の方に力を込めた。宗吉は良心的に、「せっかくの西洋科学も扱い様によっては、邪教とみなされることもある」

ということをつくづく知ったのである。刑死した二人の弟子の冥福を祈りながら、彼は堅実にオランダ医師としての生業に努力し続けた。天保七（1836）年五月一日に、宗吉は死んだ。七十三歳（数え）であった。

ところで告発者の大塩平八郎だが、この事件で彼は一躍有名になった。当時の町奉行は高く評価し、  
「わしはいずれ江戸城へ戻る。その時はお前を呼

んでしかるべき職に就けよう。楽しみに待て」

と云った。町奉行の名は高井山城守。言葉通り、やがて江戸（幕府）に呼び返され、要職に就いた。大塩は喜んだ。期待した。

高井が在任中に大塩は高井のすすめによって隠居した。家督は息子に譲ってした。学問の塾を開いた。奉行所の同心（与力の部下）も何人か入門した。“すぐ怒る先生”として有名になった。江戸の高井からは何も云ってこなかった。

新しい奉行はその時の老中筆頭の水野忠邦の実弟だった。「大坂には大塩平八郎という与力がいて、なかなか気難しい。下手に扱うと厄介になる。隠居しているが市政への影響力はかなり大きい。そのへんはうまくやりなさい」

と前任の高井から助言された。が、水野の弟は鼻先でフンと笑った。表面は、  
「そうしましょう」と肯いたが、腹の中では（奉行が一与力に振り廻されてたまるか。俺はそんな真似はしないぞ）

と心を決めていた。大塩にとって不幸な上司との出会いだった。隠居の身がせめてもの幸いだった。

年月が経った。ある日大塩は高井の死を知らされた。この頃の大塩は、  
「地方の役人がどんなに優秀だろうと、中央に呼ばれた例はひとつもない」

ということを知っていた。しかし大塩は高井を恨まなかった。（高井様は本気だったのだ）と旧上司の善意を信じた。

大塩平八郎が大坂市民のために乱を起したのには、私はこの人事問題も絡んでいたような気がする。もちろん橋本宗吉には何の関係もない。